## 向後紀代美氏 「遅咲きのバラになる！」

### ～残りの人生の「主人公は私」 希望ある未来を作るには？～

2023 年 5 月 13 日、神奈川支部講演会が行われ、講師に向後紀代美さん（昭 38 地）をお迎えしました。
当日は、4年ぶりとなる会場開催での支部総会。久々の再会の機会に講演をお願いし、女性研究者としての人生を語っていただきました。 お茶の水地理学会や大学女性協会などを通じ、神奈川支部会員以外にも広く呼びかけ、教育やジャーナリズム等の各界で「女性リーダー」として活躍される方々からも参加がありました。

向後さんは、地理学に魅せられ、世界を旅した経験を、さまざまなエピソードとともに紹介されました。夢をともにする向後元彦氏と結婚後は、一緒に、あるいは個々に世界を巡ります。若い日に読んだスウェン・ヘディン著『タクラマカン砂漠横断記』が「人生の目標となった本」で、これをきっかけに訪れた憧れのタクラマカン砂漠、さらには 6,000 メートル級のヒマラヤ未踏峰をはじめ、世界各地を「辺境の旅人」として巡った経験を数々の写真を示しながら語ってくださいました。

同時に、出産や子育て、単身赴任などを経験するなかで女性研究者としての悩みや葛藤があったことにも触れ、同様の時代を生きてきた多くの参加者の共感を呼びました。ネパールから陸路英国に入り、最初の出産はロンドンでのことでした。英国が「ゆりかごから墓場まで」という言葉で知られる充実した福祉社会だった時代、出産費用は無料だったといいます。けれど、その後、夫と自分で行動の自由が変わったことを体験し、「子育てが男女の分岐点」という意識を持つようになりました。同じ夢を追いかけながら、遠征隊参加のため西アジアに出かける夫と、赤ん坊を連れて帰国後、保育園探しをする自分。しかし、赤ん坊を連れながらも、アイスランド経由で地球一周して帰国するという、向後さんのバイタリティには驚かされました。

旅先で生き生きとした表情を見せる長女をとらえた写真には、向後さんの子育ての一端が垣間見えました。子連れでも、思い切って踏み出してみれば、人々が親切に助けてくれるという経験を経て、毎日新聞社から刊行した著書『エミちゃんの世界探検』には長女の名前が付けられています。

女性研究者として「温室のような」お茶大を飛び出し、東京大学大学院へと進んだ向後さんは、当時の男女の境遇の違いに直面します。トイレ一つとっても、男性との共用を我慢しなければならなかった時代に、いくつもの学校で非常勤講師をしながら研究を続けたといいます。年限いっぱい勉強するために、わざと一つだけ単位を取らずにいたら、他は全て修得していたのに「中退」になってしまったというエピソードも印象的でした。

研究生活に限らず、日常においても女性の立場をふと思い知らされる場面として、例えば、納税通知書の宛名に自分の名前はなく「ほか１名」と処理されていたり、コロナ禍での給付金も

配偶者の口座にまとめて支給されたりといった例を挙げ、「ある時期まで、そうしたことに自分も疑問を持たず、抗議もしなかった」と振り返りました。

仙台の東北学院大学への単身赴任では、毎週末東京の自宅に戻っていたといいますが、やがて、日本に夫と子供を残して中国に1年間滞在するという経験もされ、「長い人生、支えたり、支えられたり」と、しみじみ実感したそうです。

そうした経験は、向後さんを「女性グループが未来を開く」というテーマに向かわせることとなります。グローバルな組織で女性リーダーを育成する仕事に携わったり、一方で地元のグループで「ゆるやかなつながり」を大切にしながら、好きな花を植えてゴミ捨て場を蘇生するといった地道な活動をおこなったり、様々な社会への働きかけをしてきました。

その原点にあるのは、多様性を認めつつ、「みんなが生まれてきてよかったと思える社会」を目指したいという思いです。激動の時代に女性研究者として苦楽を味わい、同志ともいえる夫と夢を追いかけ、女性に求められる役割もこなしながら生きてきた向後さん。演題にある「遅咲きのバラ」という言葉に、向後さんの自負と、「人生は長い」というエールが強く感じられます。比較的年齢層の高い参加者が多かっただけに、この講演に勇気づけられたという声が多数聞かれました。

自身も支部会員である向後さんは、講演会の前に行われた総会にも出席し、神奈川支部の運営を方向付ける議事に参加されました。

向後紀代美さん、皆が元気になれる講演をありがとうございました。

## ★受講者からの感想★

講演会に引き続き行われた懇親会で、参加者一人ひとりが近況や大学卒業後の体験などを語りましたが、そのなかで、向後さんの講演に対して感想を述べる方がたくさんいらっしゃいました。以下に要旨を紹介します。

・向後さんの、エネルギッシュにご活躍の様子を聞けてうれしく思いました。
・「良妻賢母は卒業」という言葉がとても心に響きました。学生時代、大学の先生ですら「女は早く嫁に行け」などと言っていたことを思い出し、時代を感じました。
・女性は男性よりも制約や不自由もある一方、選択肢もあると、向後さんのお話から感じました。
・とても元気な気持ちになれて、お話が聞けてよかったです。
・生きるヒントをいただき、とても刺激を受けました。

神奈川支部では、今後も様々な講演会を開催していければと考えております。皆さま、ありがとうございました。